

魚道で用水路と結ぶ

レンコン畑を 魚の天国に

徳島県鳴門市 斉藤政明さん、倫子さん夫妻



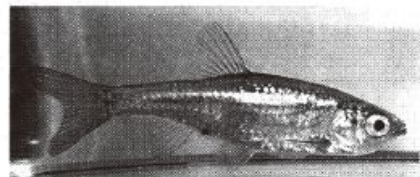
斉藤さん一家。年間を通じて豊富な水量は、淡水魚にとっては絶好の生息環境だ

斉藤さんが、徳島大学や農業支援センターの協力の

絶滅危惧種に産卵場所提供

カワバタモロコ、メダカ……

「徳島支局」魚がすめるような環境で、農産物も質の良いものを作ろう……。鳴門市大津町の斉藤政明さん(67)、倫子さん(67)夫妻は、息子の繁明さん(38)とともに、レンコン畑に魚道を設け、絶滅危惧種の淡水魚・カワバタモロコやメダカなどに産卵場所を提供。多様な生物が共存する、環境にやさしいレンコン栽培に取り組んでいる。



カワバタモロコ



▲5月11日、農業関係者や住民らが多数参加し、魚道作りを行った(自然再生型農業プロジェクト「えんたのれんこん」)



設置した魚道

上々だ。斉藤さん一家は、常に環境にやさしい農業を心がけてきた。15年あまり前から、魚の残渣に米ぬかを練り込んだ有機肥料を使用している。

「いろいろ試しましたが、魚と米が、日本人に昔から慣れ親しんだ一番身近なものだと思っただけです。魚はカルシウムも豊富ですからね」と倫子さん。2003年には、県のエコファーマーに認定され、安全

もと、魚道でレンコン畑と用水路をつなげる試みを始めたのは昨年の春。魚道の太さや設置する角度など、試行錯誤しながら、幅20センチ、長さ2メートルほどの魚道を3カ所設けた。

「レンコン畑は卵を産みつける場所であり、稚魚のときに、ほかの魚などに食べられないよう身を隠す場所にもなっています。生物のすみかを支える貴重な湿地帯の役目を果たしているんですよ」と倫子さん。以前よりも、ザリガニをよく見かけるようになり、昨年は45センチほどのナマズが、魚道を通って畑に入ってきた。

そんな自然豊かな土壌で、愛情込めて育てられたレンコンは、「母ちゃんみたいにすっしり重くて柔らかい」のが自慢。JAなどに出荷するほか、「かあちゃんれんこん」の名前で松茂町のとくとくターミナルなどでも販売され、評判は

「自然の力は大きい。これからも、自然とともに育ち、共生しながら、楽しめる農業を目指したい」と話してくれた。(真貝)